論文

『白花』に見られる朴花城の創作の原点

A Starting Point of Park Hwa Sung's Writings seen in *Baekhwa*

山田　佳子[1]
YAMADA Yoshiko

1　はじめに

1925年、李光洙の推薦により『朝鮮文壇』に「秋夕前夜」を発表し、登壇した朴花城の初期作品は、同時代の他の女性作家たちのものとは異なり、日本の植民地支配や階級社会に対する強い批判的な態度から書かれている。代表作としてしばしば取り上げられるのは、「秋夕前夜」に続いて発表された「下水道工事」である。しかし実際には「秋夕前夜」の前に長編『白花』を完成させていた。

「秋夕前夜」の発表後、朴花城は母校の淑明女子高等普通学校4年次に編入学して正規の課程を修了し、1926年、日本女子大学英文学部に入学する。この留学中に書かれたのが長編『白花』である。『白花』は朝鮮の女性作家による最初の長編小説であり、1932年6月から11月にかけて『東亜日報』に連載され、一定の人気を得た。しかし歴史を題材にした内容や古典的な文体が朴花城の一連のリアリズム作品とは異なるためか、本人の作ではないという根拠のないゴシップが出回るなどの受難に遭い、女性作家初という記念すべき作品でありながら、朴花城の代表作として挙げられてはこなかった。

しかし『白花』は登壇後最初の作品であり、学生の身分だった朴花城が学業や私生活に追われるなか、発表のあてもなく書き続けた作品であればこそ、そこには作家朴花城の執筆に対する意欲や問題意識がありのままに表れているはずである。

本稿では『白花』を通し、朴花城文学の形成過程を明らかにすることを目的とする[2]。

2　『白花』の執筆から連載までの経緯

1903年、第一次日韓協約が結ばれる前年に朝鮮半島南部に位置する開港都市木浦に生まれた朴花城は幼い頃から日本の支配に対して強い反発を抱いていた。1897年に開港した木浦はそれを機に植民地近代都市形成への道を歩み、人口が急増した。日本人居留地が作られて都市が整備され、朝鮮人の居住地とは対照を成した。朴花城の二番目の兄、済民は木浦では知られた活動家で、労働運動を指揮してはたびたび収監されていた。朴花城はそのような兄を間近で見るなかで、開港によって発展していく木浦の様子に批判的な眼差しを向けるようになる。登壇作の「秋夕前夜」には若い花城が鉄道の開通などによって近代化を遂げていく故郷を誇る気持ちが垣間見える一方、日本の紡績工場で働く女工の置かれた環境の劣悪さが浮き彫りにされている。

登壇前の朴花城は教師として各地を転々としていた。女学校卒業後に東京留学を予定していたものの家庭の事情で叶わず、教師をしながらその機会を待っていた。女学校を出たばかりでまだ世の

中を知らない純粋な少女にとって、それらの地での体験は忘れ難い記憶となった。なかでも若い女性に向けられる好奇の目は耐え難い苦痛だったようであり、「秋夕前夜」に描かれた工場内における女工への暴力を通じてもうかがい知ることができる。

「秋夕前夜」の発表後、朴花城は母校の淑明女子高等普通学校4年次に編入学して正規の課程を修了し、1926年、日本女子大学英文学部に入学する。この留学中に書かれたのが長編『白花』である。

『白花』の構想を始めた時期については自伝的小説『吹雪の運河[3]』の中で大学2年、すなわち1927年の春からとされているが、この頃、木浦の労働運動を率いていた兄の知り合いで、のちに共産党員となる清家としが主宰する読書会への参加を始め、日本在住の活動家とも接触を持つようになる[4]。そしてその秋には推薦を受けて槿友会の東京支会長となり、警察に連行されたこともあった。3年の春になるとその職を辞し、個人的事情によりいったん帰国する。そしてこの休学中に活動家の金国鎮と結婚する。『白花』の執筆もこのころ始めている。その後、再び東京に戻り、早稲田に籍を置いて仲間と活動を続ける夫を助けながら長女を出産したのち復学を試みるが、結局、退学に至る。『白花』の執筆はこうした生活の中でも続けられた[5]。

1931年に帰国すると、先ず短編「下水道工事」を『東光』1932年5月号に発表する。このとき『白花』はすでに完成しており、原稿を見た李光洙は当時、自らが編集局長をしていた『東亜日報』に掲載することを約束したが、その前に短編を一つ書くことを求めた。それが「下水道工事」である。長いブランクを挟んでほとんど忘れられた朴花城の名を世に思い出させるための準備方策だった[6]。

「下水道工事」は当時の木浦で実際に進められていた下水道工事を素材に、労働者と資本家の対立を描いた作品であり、「秋夕前夜」に見られたような、故郷の発展を誇るような描写は消え、階級社会に対する批判的態度がいっそう強まっている。

その一方、「秋夕前夜」を評価して登壇に大きな役割を果たし、また『白花』の連載を決めた李光洙は「下水道工事」を否定的に見ており[7]、朴花城の作品に対する評価の基準が一様ではないことを示している。同様に、『白花』に対する評価も読み方によって分かれる。

3　『白花』の概要

『白花』が発表されると、読者からは好評を得たようである。李光洙は読者の反響は予想以上だったとし[8]、朴花城自身は連載中から多くの声援を受けたとしながら、その理由として漢詩や歌が挿入されていることを挙げている[9]。また、李泰俊も磨かれた文章と詠嘆調の言い回しが朗読を好む茶の間の女性たちに特に喜ばれたとし、文学に対する熱い情熱が感じられると評価している[10]。

しかしその一方、文壇の一部から兄済民の作だと中傷されるなど、ようやく世に出た『白花』は傷つけられた[11]。『白花』は妓生白花を主人公とする長編歴史小説であり、現実社会をリアルに描いた「下水道工事」に続いていきなり目にした読者にはかなり異質なものに思えたに違いない。そこにはまた新人作家、それも女性作家が最も男性的な領域であった歴史小説を書き、『東亜日報』という全国紙に連載したことに対する衝撃も作用していたようである[12]。

朴花城は幼い頃から朝鮮の古典小説を手当たり次第読んでいたという[13]。『白花』が古典小説の形を借りているのはそうした読書歴にあると思われる。そして以前から封建時代を背景に小説を書きたいと思っていたものの、歴史の知識が乏しいため「白花を据えるにふさわしい歴史的背景」を求めて兄に助言を求めたと明かしている[14]。そうして『白花』が描く権力者の横暴と女性への暴力、農民搾取などの社会の悪を効果的に見せる背景となったのが、政治腐敗が甚だしさをきわめ、国家

存亡の危機に瀕した高麗末期、忠惠王から恭愍王、禑王に至る時期である。

また、長編の定型詩「沈浮思」の挿入も特徴的である。妓生白花が特別に伝授されたコムンゴの曲「沈浮思」の詩は連載7回分を占める大作であり、『白花』のプロットと密接に結び付いている[15]。

「沈浮思」はノ・ヨンスクの解釈によると、中国古代の伝説的な王、天皇氏と神農氏の登場に始まり、夏、殷、周から前漢に至るまでの諸王と国家の興亡盛衰を伝えている。詩の最後は前漢の元帝の後宮、王昭君が匈奴のもとへ捧げられる場面に至り「烈士佳人の霊魂」を回顧する。すると場面が百済の落花岩へと転換し、童子が王に酒を注いで短簫とコムンゴを演奏し、「義」を称えて終わる。一言で言えば「沈浮思」は不老長寿をよしとせず、忠義を尽くすことの価値を伝える詩だという[16]。

『白花』では高麗末期の腐敗した政治を批判しながらも新興勢力に与せず、あくまで「義」を貫いて殺された鄭夢周を肯定的に描いているが、その精神に共鳴するように、白花の奏でる「沈浮思」の響きが作品全体を覆っている。

こうした演出の下で展開されるのが王をはじめとする権力者の横暴とそれによる民衆の被害、そして抵抗の物語である。

4　『白花』の展開

『白花』は連載167回に及ぶ分量の中に、清廉な儒者を父に持つ一珠が暴君の命によってその父を失い、父が将来を託した馴染みの瑞龍とも引き離されて妓生白花となったのち、富や権力をふりかざす男たちの暴力や好色に耽る王の欲望と闘い、やはり権力の犠牲者である下層民たちの力を得ることで瑞龍との再会を果たして新たな世界へ旅立つまでの波乱万丈が展開される[17]。

冒頭では高麗末期、忠惠王の時代の政治腐敗ぶりについて語られる。作品中、所々に高麗末期の政治状況が挟まれるが、あくまでその語りは作品を導く作家の意図に沿ったものであり、一珠の父と瑞龍の伯父とは鄭夢周と親交があったという前提である。物語は架空であり、女性の物語が多くを占める。以下、全体を大きく四つの部分に分けて見ていく。

先ず、主人公白花と、その相手方となる瑞龍の物語から始まる。ここで展開されるのは、白花が騙されて妓生となった顛末と、瑞龍誕生の秘話である。瑞龍の父は忠惠王の妾腹で瑞龍も王の姓をもつ。作品では忠惠王に犯された瑞龍の祖母、柳氏の運命に連載7回分の分量を割き、王の好色ぶりと暴力を生々しく描いている。その孫瑞龍も不幸な運命を辿って孤児となり、鄭夢周との縁で白花の父の下で育てられた。しかし白花の父は忠惠王に対し、その腹心である僧辛旽の弾劾文を送ったことにより処刑され、幼くして母を失くしていた白花も孤児となり、騙されて西京で妓生となった。そして「沈浮思」によって西京一の妓生と評判になると、迫りくる富者や権力者を退けながら、幼い頃に父の前で瑞龍と詠み合った詩の一部を空欄にした掛け軸を部屋に掛け、そこを埋めることのできる唯一の人物である瑞龍を待っている。

二つ目は白花の妹格、草玉の物語である。全州の豪商の一人娘として生まれた草玉は、幼くして母を亡くすと継母から虐待を受けるようになり、まもなく父も他界してしまうと、情夫にそそのかされた継母の差し金で売り飛ばされ、転売の末、白花と運命を共にするに至った。草玉は、富者や権力者を受け入れない白花に代わって宴に出向くこともあり、ある日、罠にかけられ富者や役人の放蕩息子らによって輪姦され、死を口にするようになる。それから二人は男たちの暴力への復讐を誓い合い、絆を強めていく。

白花や瑞龍の物語を腐敗した王による王権の乱用とその被害とすれば、草玉の物語は社会全体にはびこる、人身売買に代表される女性の悲劇である。

三つ目に展開されるのは小作人や行商といった社会の底辺に位置する人々の物語である。彼ら下層民は凶作の年に地主から田畑と土地、さらには家まで奪われ、娘を妾に取られたり、輪姦されたりと、悪徳地主やその放蕩息子たちによってあらゆる被害を受ける。さらに、好色な僧による女性たちの被害にも多くの分量が割かれている。行商ヨサンとその妻をめぐる物語がそれである。

ヨサンの妻はヨサンとは年の離れた後妻であり、子宝祈願に寺に通ううち熱心な信者となるが、その寺で媒佛善者という腐敗僧に誘惑されて以来、自ら姦通を繰り返すようになる。寺には他にも多くの若い妻たちが訪れ、媒佛善者の餌食となっていた。媒佛善者は架空の人物であるが、後継ぎのいない恭愍王に妾の産んだ子を捧げたとされる辛旽をはじめ、当時の僧たちの腐敗ぶりが反映されている。

媒佛善者にすっかり魅了されたヨサンの妻は、姑を毒殺したうえ、ヨサン殺害も命じられる。しかしそこへ白花を探して放浪を続けていた瑞龍が衰弱した姿で現れる。すると今度は瑞龍の魅力に取りつかれて媒佛善者を刺し殺し、自らも服毒自殺する。こうしたヨサンの妻の死について話者は「原因はただ一つ所から発生している[18]」と語り、むしろ憐れみの対象としている。若くして後妻として嫁ぎ、息子を授かるために子宝祈願に寺を訪れなければならなかった境遇が示しているのは「男性万能の時代[19]」における女性の不幸である。

そして最後に、西京一の富豪も力ずくで退け、瑞龍ただ一人を待つ白花に辛旽の子とも言われる禑王が迫りくる。三日前、禑に呼ばれた白花は病気を装って盃を断ったうえ、父の死をはじめとする権力者の横暴のすべてを露わにして激しく政治批判をしたが、酔った禑はそんな白花をますます気に入ってさらに迫ってきたため、白花は三日後に端午の宴を開くことを提案してその場を収めていた。

その端午の日、ヨサンら下層民たちは瑞龍を伴って白花のもとへ駆けつけるべく手段の限りを尽くす。一方、草玉は禑と舟遊びをする白花にいよいよ危機が迫ったときには乗り移るつもりで自らも舟を用意して備えていた。結局、白花と草玉は舟の上で王と乱闘を繰り広げた末、川に落ちたところをヨサンらによって救出される。

以上に見たような権力者の横暴による女性や下層民たちの被害、そして抵抗の物語の中で、何より大きな軸を成しているのが主人公白花と瑞龍の別れから再会に至るまでの経緯であり、それを演出するのが「沈浮思」と、かつて二人が詠み合った詩である。

5　『白花』の芸術性

朴花城は『白花』の構想に際し、梁建植の「情界佳話 瑞雲[20]」からヒントから得たと明かしている。なお、梁建植の号は「白華」である。

「瑞雲」は中国清代の短編小説集、『聊斎志異』に収められたごく短い小説で、梁白華の「瑞雲」はその翻訳に近い[21]。主人公で名妓の瑞雲は自分の身を預ける相手だけは自分で選ぶと主張し、富者や身分の高い者は相手にせず、清貧な学者である賀という男とだけ心を通わせる。しかし、賀は自らの身分を考え、意に沿わぬ者に身を任せなくてはならない瑞雲の運命を憐みながらも身を引く。するとある男が現れて瑞雲の顔に傷を与え、誰からも相手にされなくなった瑞雲は下女に転落する。そこへ瑞雲の窮状を知った賀が再び訪れ、かつて自分を尊重してくれた瑞雲を慈しみ、正室として連れ帰る。

その1年後、賀は旅先で出会った男から執拗に尋ねられ、瑞雲は自分が引き取ったことを告げる。すると男は瑞雲の容貌ではなく、心根を見て受け入れた賀の精神を賞賛し、賀の家に赴いて瑞雲の顔を以前よりもさらに美しく蘇らせ、ハッピーエンドの結末となる。最後に二人を結びつけた謎の男が神仙であったことが明かされる。

「瑞雲」は神仙の存在を除いては白花と瑞龍の別れと再会の過程に通じるものがある。瑞龍もまた才はありながらも富も権力も持たず、一時は一珠（白花）の前から姿を消すが、一珠が白花となって危機に瀕したときに再び現れ、白花を救うために手を尽くすのである。

しかしながら「瑞雲」の特徴は何より神仙の存在にあると言ってよい。梁白華は同じく『聊斎志異』の中から「神仙術」も翻訳していることから[22]、朴花城がこれを読んだとすれば神仙にインスピレーションを得たことが考えられる。そうだとすれば神仙に匹敵するものとして、『白花』では「沈浮思」に神仙の役割が与えられているように読むことができる。

「沈浮思」の由来について、白花の師匠、典華堂は次のように語る。

> ……その昔、漢の光武帝時代の奇谷山中に一人の弦士がいてこの歌を詠み歌った。後世の人々は興亡歌とも呼ぶが、それは人間数万年の興亡盛衰を歌っているからだ。そうした人間の歴史の治乱盛衰の意味を後世への遺訓とすべく、友人の典華庵という当代一の韻律の名人に沈浮思の曲を作らせた。それが私の師匠、典華泉の祖先だ。沈浮思には二つの韻律があって私は弦楽を教わった……[23]。

先に見たように伝説上の中国古代に遡る「沈浮思」は漢の時代から何代をも経て白花の師匠である典華堂に伝授され、白花はその後継者としてコムンゴを奏でる。一方、瑞龍は放浪中に短簾の「沈浮思」を典華楽という師匠から伝授されており、作品ではそれぞれの「沈浮思」が二人に互いの存在を確信させる役割を担う。

すなわち白花が奏でるコムンゴの調べを耳にした瑞龍は促されるようにして、自らの境遇を顧みることなく白花のもとを訪れる。そして白花がコムンゴで「沈浮思」を奏でると、瑞龍は短簾で「沈浮思」を吹き、二人の視線がかち合う。「瑞雲」において神仙が二人の男女を再会させたように、『白花』では遥か伝説の時代から始まる「沈浮思」が白花と瑞龍を再会させたと解釈することができる。

さらに、『白花』の大団円は白花の救出に成功したのち、白花、草玉、瑞龍、ヨサンら一行が江原道襄陽で新たな生活を営む場面へ転換する。王朝交代に際して鄭夢周が死に追いやられ、身の危険を感じた一行は山村へと逃れたという設定である。その隠遁の地はユートピアのように描かれ、農作業のかたわら次々と歌を口ずさむ。それから歳月が流れ、一行が昇天し、『白花』は幕を下ろす。「沈浮思」の伝える忠義の体現である。

『白花』ではもう一つ、白花と瑞龍が幼い頃に父の前で詠み合った詩が二人を結び付ける大きな役割を果たしている。自らの運命を予感した白花の父は一珠（白花）を瑞龍に託す思いから、二人にそれぞれの名「珠」と「龍」を入れた詩を詠ませた。

先ず、瑞龍が「龍本無珠気不揚」と詠めば一珠が「珠不逢龍是不宝」と返し、さらに瑞龍が「北珠南龍若相得」と詠めば、一珠が「作雲為雨振天下」と返した。白花という名も瑞龍が詠んだ「白花赤蝶時相合」から取ったものである。瑞龍の訪れを待つ妓生白花はそのとき詠んだ詩の一部を空欄にした掛け軸を部屋に掛け、そこを埋めることのできる唯一の人物を待っていたのである。

このほか、作品には「サラン歌」や「相思曲」など、数々の歌が挿入され、芸術的色彩をさらに高めている。

以上のように、『白花』は朴花城の文学体験と芸術的感性が「沈浮思」や情緒的な詩を生み出し、その演出によって歴史小説でありながらも文芸に親しんだ女性読者に支持される作品となったのである。

6 『白花』の思想性

『白花』の人物設定において注目すべき点は、瑞龍が権力を持たないということであり、その点で『春香伝』の李道令とは異なる。そのため瑞龍が白花を救うためには協力者が必要であった。高い教養を持ちながらも平民である瑞龍は体力と知を備え持つ行商人のヨサンと意気投合し[24]、さらにやはり権力の犠牲者であるヨサンの仲間たちの協力を得ることで白花を救出することができたのである。つまり朴花城の意図は芸術作品の形を取りながらも、階級意識に基づく権力批判を表現することにあったとみることができる。そのことは朴花城が『白花』に対する中傷記事に反論するなかで、「階級的見地からの批判ならば甘んじて受け入れる[25]」と語っているところからもうかがい知ることができる。

朴花城の階級意識は前述のように、開港都市で目にした日本人と朝鮮人の差別的待遇や、それに対する兄の活動、また東京留学中の体験などによって強固なものになっていったと考えられるが、『白花』では下層民であるヨサンとその仲間たち一人一人に明確な役割が与えられ、権力による彼らの被害と復讐心を具体的に描いている。したがって彼らが協力して白花の救出成功に至るまでには多くの分量が割かれ、それぞれの登場人物をめぐって場面がめまぐるしく展開する。それだけに読者たちは権力への勝利を確信しているにせよ、彼らとともに一喜一憂し、最後には大きな達成感を味わったであろう。

ところで『白花』において権力によって最も被害を受けたのは女性たちである。下層民たちの怒りの根底にはその妻や娘が権力者から受けた暴力が存在する。前述のように、瑞龍の祖母、草玉、ヨサンの妻、そして白花の被害の状況についても詳細に描かれている。

朴花城は登壇前に教師として赴任した各地での体験を『吹雪の運河』のほか、随筆等に繰り返し書いている。最初に赴任した天安では差出人不明の恋文のようなものを受け取り、次の牙山では酔った男性教員から襲われそうになった。続く光州では町の有志から息子との結婚を求められもした。いずれの土地でも関わりを持つ人々は両班出身であり、そうした階層に対して否定的な印象を受けたようである[26]。

『白花』は白花と瑞龍の別れと再会の物語を芸術的演出によって描きながら、その中で階級思想、そして女性解放を主張していると見ることができる。朴花城は「階級解放は女性解放[27]」において、「階級差が解消されてこそ女性が解放される日が訪れる」と語っているが、これは権力の横暴や貧困が原因で女性が犠牲になるということであり、『白花』は当時の朴花城の問題意識を可視化していると見ることができる。

7 朴花城文学の原点としての『白花』

これまで見てきたように、『白花』は芸術性と思想性の両者の相互作用によって、美しくも芯のある作品として完成された。したがって作品に対する評価もどちらを重視するかによって分かれる。執筆当時の朴花城が「階級的見地」に基づく評価を求めているように、『白花』が階級思想に基づいていることは明らかであるとしても、一方で芸術性の高さも読者を引き付ける大きな役割を

果たしていると言うことができる。『白花』の連載を決めた李光洙が「下水道工事」を評価しなかったことがそれを示している[28]。

『白花』に続いて執筆された「下水道工事」をはじめとする朴花城の初期短編は農民や女性に階級意識を啓蒙する内容のものが多い。『白花』には直接的な啓蒙性は感じられないが、『白花』に先立って書かれた評論「女性同志に警告する[29]」において「意味のない生き方は罪」とし、女子学生や教師、母親たちに対して、恋愛や結婚生活に埋没して最初の志を忘れた人生を送ることを諌めている。同様に、逆境を乗り越えて勝利を手に入れる白花の生き方を通して読者に覚醒を促そうという目的意識があったものと考えられる。女性読者たちは『白花』のストーリーに漂う芸術的な空気の中で、白花と瑞龍の別れと再会に自らの日常と現実社会を重ね合わせ、単なる恋愛の成就とはまた異なる喜びと心地よさを感じたのではないだろうか。

朴花城が本格的な執筆活動に入るのは1930年代半ば以降である。それまで収監されていた夫が釈放され教員として龍井に赴任すると、新たに住居を確保して創作に専念できるようになったという[30]。1935年以降の作品はそれ以前の現場取材をもとにした「洪水前後[31]」などのリアリズム小説とは異なり、いずれも朴花城が教師生活を送った土地を舞台としながらも、当時の若い花城が遭遇した苦い出来事をそのまま描くのではなく、それをモチーフに風刺を利かせた展開で支配層を痛烈に批判する。こうした手法は見方によってはこの時期の文学的抵抗の限界とも言えるが、物語性と思想性が相まって小気味よく、朴花城の創作手腕の高さを示している。

「理髪師[32]」では貧しいながらも独学で知識を身に付け、青年会の幹部を務めた経歴を持つ主人公の理髪師が、駐在所所長の髪をプロとしての判断だと言って勝手に短く刈ってしまうことで騒動が起こり、「プルガサリ[33]」は議員や役人、医師、弁護士などが連なる両班家系の一家を風刺的に描いたあと、兄弟の中でただ一人、光州学生運動に関与して捕まった経験をもつ五男が監視の警官を投げ飛ばすという思いも寄らぬ衝撃的な行為を展開する。「温泉場の春[34]」では貧しさから旅館に売られたあと逃げ出して老人の妾となった主人公が、老人と訪れた温泉で元の旅館の女主人と出くわし、老人と女主人の間に主人公の売買をめぐって丁々発止の金銭ゲームが繰り広げられる。これらの作品は検閲によって削除された箇所もあるなど、権力への強い抵抗姿勢が示されているものの、その表現方法は直接的ではなく、読者の興味を引き付ける。

その後解放を挟み、1955年から本格化する長編中心の創作活動は解放後の社会を背景に、さらに読者の予想を超える波乱万丈の展開の中で、汚職のはびこる政治や旧態依然とした社会に対する批判とともに、新たな時代の方向を指し示す。

『峠を越えれば[35]』は、主人公の女子学生の「出生の秘密」を背景に、解放前の社会に果たした主人公の親世代の貢献に言及しつつも、若者世代への希望を描くことに精力を傾ける。主人公の生みの親が平壌出身の女性であったという設定は解釈の幅が広く、当時の朴花城の思想傾向を知る手がかりとなり得るが、作品にはそうした思想性はなく、主人公は生みの親にも育ての親にも、さらに育ての親と恋愛関係にあった男性の妻にも同情し、感謝する。すなわち過去の歴史を女性たちの苦悩に置き換え、新たな国では青年男女が主人公となるべきであることを示していると見ることができる[36]。

『明日の太陽[37]』においては主人公の離婚した夫が北出身であったことが明らかになって再婚に水を差すことになる。しかしそれは単に感情的な問題として処理され、大きな支障にはならない。そして主人公の人間性が優先され、当時の社会では否定的に見られていた女性の再婚が成就する。ここでも主題となるのは若い世代が背負う自国の将来への希望である。

ところで両作品に共通する北との因縁の下りにはどのような目的があったのであろうか。『白花』

に流れる「義」の意味を鄭夢周の高麗政府に対する忠義になぞらえ、大韓帝国に対する義と解釈するならば、二つの作品が見せる新たな時代への希望は大韓民国の国民としての義、言い換えれば矜持とも読み取れるが、朴花城の真意はわからない。この時期の韓国の政治状況を考えたとき、北朝鮮との関わりをどう描くかは作家生命を左右する事柄であっただけに慎重に検討する必要があり、本稿の範囲を超える。今後の研究課題である。

『峠を越えれば』と『明日の太陽』は連載後すぐに映画化された。それは物語展開が高く評価されたからと考えられる。読者の反響を重視する新聞連載小説はその人気が新聞の発行部数に影響を及ぼすため、巧みな展開が要求される。朴花城の作品はその要求にじゅうぶんに答えるものであり、解放後の朴花城は大衆作家とみなされてきた。しかし朴花城の狙いは読者の興味を引き付ける展開の下で、解放後の社会における権威主義や旧態依然とした旧世代に代わる若者世代の生き方を描き出すことにあったと見ることができる。そのような創作力、そして批判精神に基づく新たな時代への希望は『白花』においてすでに表現されていたものである。

解放前の朴花城に対する評価は「下水道工事」に代表される階級的傾向の作品が取り上げられ、「線が太くスケールが大きい」、「テーマが明確」など、良くも悪くも同時代の女性作家とは色彩が異なる点をとらえたものが多かった[38]。しかしその思想性を伝えるのに高い創作力が大きな役割を果たしていることも押さえておく必要がある。

『白花』には朴花城の幼い頃からの読書体験に基づく物語の創作力と植民地下で培われた権力に対する批判精神がすでに表れており、それらが相まって独自の文学世界が形成されていったのである。

8　おわりに

本稿では朴花城の長編小説『白花』について三つの点、すなわち芸術性と階級社会における民衆への抑圧、なかでも女性に対する暴力に注目して論じた。『白花』の芸術性は、朴花城の幼い頃からの読書体験とそれに基づく創作力がその基礎にあり、作品を通して流れる「沈浮思」の響きや、詩の挿入は朴花城の芸術的感性の発露として、物語の進行において大きな役割を果たしている。また、階級社会における抑圧や女性に対する暴力は、開港都市木浦に生まれ育った朴花城自身の成長環境と、東京留学や兄の影響によって高まった問題意識、そして若い時代に体験した女性の苦難が根底にあることを確認した。

留学中の朴花城がなぜ発表のあてもなく『白花』を書き続けたのかを考えるとき、それは職業作家として歩み始めるにあたっての言わば所信表明のようなものではなかったかという答えにたどり着く。『白花』に見出された朴花城の執筆の特徴は解放後に書かれた多くの長篇小説に受け継がれている。解放後の朴花城はその高い物語性ゆえに大衆作家とみなされてきたことも事実であるが、今後は大衆作家としての側面を肯定的にとらえ、朴花城文学をさらに掘り下げる作業が必要だと思われる。

注

1　新潟県立大学国際地域学部

2　本稿は朝鮮学会第72回大会（2021.10.3）における発表原稿「『白花』に見る朴花城文学の原点」に加筆、修正を

施し、再構成したものである。

3 朴花城『吹雪の運河』、『女苑』1963.4～1964.6。

4 朴花城の留学時代の体験については拙稿「朴花城の東京留学時代」（『県立新潟女子短期大学研究紀要』第45集、2008）参照。

5 朴花城「『白花』出版記念会」、『私の交友録』（『私の生と文学の余禄』、ハルラ文化社、2005、p.243所収）。

6 朴花城「女流作家になるまでの苦心談」、『新家庭』1935.12、p.40。

7 朴花城『吹雪の運河』、『朴花城文学全集』第14巻、プルン思想社、2004、p.181。

8 李光洙「『白花』と花城」、『白花』、彰文社、1934、p.3（『白花』、プルン思想社、2007再録）。

9 朴花城「『白花』出版記念会」、前掲、p.252、『吹雪の運河』、前掲、p.180。

10 李泰俊「朴花城著『白花』」、『朝鮮中央日報』1934.3.25。

11 『白花』に対する中傷と朴花城の反論は朴花城「小説『白花』について－『女人』誌十月号を読んで」、『東光』1932.11、p.85参照。

12 ソ・ヨンチェ「朴花城、木浦の女性の執筆」、第15回素影朴花城文学フェスティバル（2021.10.9）論文集、p.42。

13 朴花城『吹雪の運河』、前掲、p.47。

14 注11参照。

15 「沈浮思」は兄済民の手によるところが大きいようである（朴花城「『白花』出版記念会」、前掲、p.252）。じっさい、新聞連載時には詩の末尾に兄の号「시풍（時風）」が入っていた。

16 ノ・ヨンスク「歴史に記録されない者の浪漫的形成化－朴花城の『白花』論」、『人文論叢』第3号、2014.8、p.230。

17 『白花』の詳細については拙稿「朴花城の長篇小説『白花』について」（『県立新潟女子短期大学研究紀要』第46集、2009）参照。

18 朴花城『白花』、プルン思想社、2007、p.381。

19 同上、p.49。

20 梁白華「瑞雲」、『開闢』1924.10。

21 『聊斎志異』の日本語翻訳本には柴田天馬訳『ザ・聊斎志異－聊斎志異全訳全一冊』（第三書館、1992）のほか、一部のみ訳出した立間昭介訳『聊斎志異』上・下（岩波文庫、1997）などがある。

22 梁白華「神仙術」、『開闢』1924.8。

23 朴花城『白花』、前掲、p.72。

24 ヨサンの人物像については「暇さえあれば読書をし、知識を得るために努力していたため、仲間の間でも優れた学識の持ち主だった」と詳細に記述され（『白花』、前掲、p.305- 6 ）、両班出身の瑞龍と対等な関係が築けるように設定されている。

25 朴花城「小説『白花』について－『女人』誌十月号を読んで」、前掲、p.485。

26 朴花城『吹雪の運河』、前掲、p.82～109参照。

27 朴花城「階級解放は女性解放」、『新女性』1933.2。

28 李無影は自らの思想的傾向から朴花城を女流文壇における輝ける存在だと評価しつつも、自らは『白花』を読んでいないと切り捨てている。一方、李光洙に対しては「下水道工事」は彼が好む性質の作品ではないにもかかわらず、なぜ推薦作としたのかわからないと疑問を呈している（李無影「女性作家概評」、『新家庭』1934.2）。このことから李光洙は『白花』の芸術性を評価し、その連載を成功させるために止むを得ず「下水道工事」を推薦作として先に『東光』誌に掲載させたのではないかと考えられる。

29 朴花城「女性同志に警告する」、『新女性』1925.3。

30 一戸建てを借り、家政婦も雇って創作に専念できる環境を整え、毎日のように送られてくる執筆依頼の中から可能なものを選んで創作したという（朴花城『吹雪の運河』、前掲、p.189）。

31 朴花城「洪水前後」、『新家庭』1934.9。

32 朴花城「理髪師」、『新東亜』1935.2。

33 朴花城「プルガサリ」、『新家庭』1936.1。

34 朴花城「温泉場の春」、『中央』1936.6。

35 朴花城『峠を越えれば』、『韓国日報』1955.8-1956.4。

36 徐正子は『峠を越えれば』について、出生の秘密が明らかになる中で人間の隠された裏面が暴かれるという推理小説的な技法が、読者に最後まで緊張と興味を失わせないと述べている（徐正子「ある理想主義者の女性超越」、『朴花城文学全集』第10巻、p.346）。

37 朴花城『明日の太陽』、『京郷新聞』1958.6-12。

38 梁柱東「女流文人 片感寸評」、『新家庭』1934.2、李青「女流作品総観」、『新家庭』1935.12、安懐南「小説家 朴花城論」、『女性』、1938.2など。